

「モニュメント」としての 多数合葬・複葬例再考

下太田貝塚における多数遺骸集積土坑の検討を中心に

Reconsideration of Mass Secondary Burials Serving as Monuments :
Focused on Mass Burial Pits at the Shimo'ota Shell Mound

山田康弘

YAMADA Yasuhiro

はじめに

①多数合葬・複葬例とその解釈

②下太田貝塚における多数遺骸集積土坑

③下太田貝塚の多数遺骸集積土坑と「記念墓」との比較

④「モニュメント」の存在意義

おわりに

【論文要旨】

縄文時代の関東地方の後期初頭には、多数の遺体を再埋葬する多数合葬・複葬例という特殊な墓制が存在する。このような事例は、再埋葬が行われた時期が集落の開設期にあたる、集落や墓域において特別な場所に設けられている、幼い子供は含まれない、男性が多いといったいくつかの特徴が指摘でき、現在までに6遺跡7例が確認されている。このような墓制は祖霊祭祀を行う際に「モニュメント」として機能したと思われるが、同様の意味を持ったと思われる事例は、福島県三貫地貝塚や広島県帝釈寄倉岩陰遺跡などでも確認されており、時期や地域を越えて確認できる墓制だと思われる。

従来、同様の事例とされてきた千葉県下太田貝塚から検出された3例を今回検討したところ、下太田貝塚の事例はいずれも、「モニュメント」としての意義をもつ多数合葬・複葬例の特徴に該当しないことがわかった。このことから、筆者は下太田貝塚の事例は、「モニュメント」としての意義を持たず、単に遺体を集積し「片付けた」ものと判断した。

また、縄文時代の後半期には墓を含む大型の配石遺構などが「モニュメント」化し、祖霊祭祀の拠り所となるものが多くなるが、このような多数合葬・複葬例もその文脈の中で理解できると考えられる。すなわち、縄文時代の後半期においては、集団関係の新規作成や集団統合・紐帯強化のための一つの手段として、人骨および墓の利用が行われるようになり、「記念墓」がその新しい集団の「シンボル」・「モニュメント」となるような状況が創出された。その精神的・技術的背景には、系譜関係の意図的切断・統合といった、系譜的な死生観の応用が存在する。大規模な配石遺構も含めて、シンボル化した「モニュメント」において祖霊を祀ることによって、さらなる集団関係が再生産されていくとともに、何故に自分たちがそこに存在し、各種資源を優先的に使用するのかという正統性を表示・再確認することになる。そこには新たな「伝統」の確立が意図されており、祖霊観の存在および祖霊祭祀の意義を読み取ることが可能である。

【キーワード】 縄文時代、多数合葬・複葬例、モニュメント、祖霊祭祀、下太田貝塚

はじめに

関東地方の縄文時代中期の終わりから後期の始めにかけての墓には、いったんは個々の墓に埋葬した遺体を再び掘り起こして、十数体もの遺体を1つの墓に集めて再び埋葬し直したものが存在する。このような事例を、筆者は多数合葬・複葬例と呼んでいる。多人数を1カ所に合葬して、なおかつ埋葬回数が複数回に及ぶ事例、という意味である。

多数合葬例を巡っては、かねてより渡辺新が多角的な視点からの研究を展開しており〔渡辺1991・1994・2015・2016など〕、筆者もかつて検討を行ったことがある〔山田1995・2008a・2008bなど〕。その後、千葉県茂原市下太田貝塚からも多数合葬・複葬例かと思われる事例が3例検出されるなど〔菅谷編2003〕、事例数は増加している。

特に下太田貝塚例については、谷口康浩が西本豊弘・篠田謙一らによるmtDNAの分析結果〔西本他2001：7-9〕から母系血縁者が中心になっているものと推定し、茨城県中妻貝塚の事例等とも合わせて、母系制社会の存在を示唆している〔谷口2008：128-129〕。また、石川健は「多遺体埋葬墓」と墓域構造を分析し、歯冠計測値による血縁関係推定法を用いながら、これを「複数の氏族集団から選択された被葬者が氏族ごとに「多遺体埋葬墓」を取り囲んでそれぞれの分節空間に埋葬されているもの」とし、「縄文時代の房総半島では、地域社会を構成する複数の氏族から生前の職能や特殊な能力などによって選択された被葬者が埋葬される、複数氏族共同の墓域が形成されていた」との解釈を行っている〔Ishikawa2014：28-29、石川健2016：84〕。

しかしながら、下太田貝塚例については、阿久川の流路が墓域を削平している可能性があり、墓域の復元に筆者自身が自信を持っていないこと、そしてこれまで筆者が検討を行ってきた多数合葬・複葬例とは異なる部分も多いことから、これを他の多数合葬・複葬例と同様の事例とすること、そして墓域の分析そのものを行うことには躊躇してきた。したがって下太田貝塚例については、それを意図的なものか考えるのか、あるいは偶発的なものとするのかという、少なくとも異なる2つの解釈が存在していることになる。先の理由から、筆者はこれまで下太田貝塚例については言及をさしてきたが、本稿では改めて下太田貝塚例を分析の俎上に乗せて検討を行うことにしたい。なお、下太田貝塚の報告書では当該事例を「多数遺骸集積土坑」と呼んでいるので、本稿でも下太田貝塚例についてはそのように呼称することとする。これと合わせて、再度多数合葬・複葬例の意義、そしてこれらも含めた概念となる「モニュメント」について考えてみたいと思う。

①……………多数合葬・複葬例とその解釈

多数合葬・複葬例の類例

関東地方における縄文時代の多数合葬・複葬例は、これまで下記の5遺跡から6例が検出されている。なお、千葉県松戸市牧之内遺跡からも類似した事例が検出されているが、人骨数が3体と小規模であることから、今回は検討から外している。これについては後述することとして、以下事例

ごとに検討してみよう。

1) 千葉県市川市権現原貝塚検出例 [花輪編1987, 渡辺1991]

1985年に市川市教育委員会が行った発掘調査で、X 13Gh3 区の P65 土壙から、多数合葬・複葬例が検出されている(図 1-1)。P65 土壙は長径 1.49m, 短径 1.33m の不整楕円形を呈し、確認面からの深さは 0.4m である。土壙底中央部には柱穴状のピットがあり、柱のようなものが立っていた可能性がある。これらの出土人骨を鑑定した山口敏は、下顎の数から 17 体としたが [山口 1987:253], 渡辺新は 18 体と推定している [渡辺 1991: 45]。これらの人骨を再鑑定した茂原信生は、その年齢性別を成人男性 6・女性 4, 未成人の男性 3・女性 3, 性別不明が成人・未成人各 1 の 2 としている [渡辺 1991: 52~63]。下顎は頭蓋と関節しているものとそうではないものが存在し、各遺体の死亡時期が異なっていたことを示唆している。頭蓋が土壙の壁沿いに配置されていたこと、四肢骨が六角形状に組まれていたことなどから、人骨は無作為に投げ込まれたようなものではなく、意図的に置かれたものであったと判断できる。埋葬が行われた時期について渡辺新は、土壙内出土土器より称名寺 1 式期と推定しているが、これは筆者も資料を実見して確認している。

本事例は加曾利 E4 式期から堀之内 1 式期にかけて形成された環状集落の広場に位置しており、また本例に近接して柄鏡形住居が 10 棟ほど、しかも堀之内 1 式期という限定された時間幅の中で、繰り返し建て替えられていることがわかっている [花輪編 1987:300]。特殊な住居に近接して本例が存在したということは間違いない。

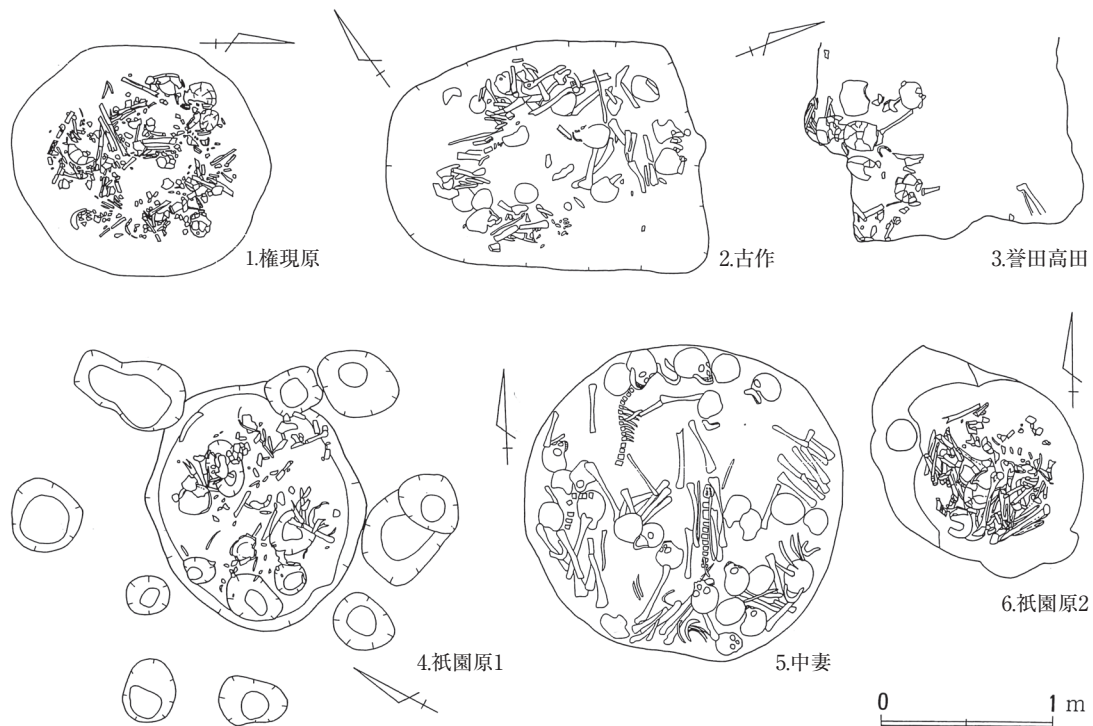


図1 各遺跡から検出された多数合葬・複葬例(縮尺不同)

2) 千葉県船橋市古作貝塚検出例 [岡崎他編1983]

1983年に古作貝塚調査団が行った発掘調査で、多数合葬・複葬例が検出されている(図1-2)。この多数合葬・複葬例はB-15～C-15区にかけて位置する土壙内から検出され、頭蓋の数からみて14体以上の人骨を埋葬したものと考えられる。この土壙は、長径1.80m、短径1.30mの隅丸方形を呈しており、また各人骨間には間層が存在しないことから、ほぼ同時に多数の人骨を埋葬したと思われる。人骨の年齢・性別構成は成人男性9、成人女性3、未成人2である。人骨の下顎は関節するものと遊離しているものがあり、複葬時の腐敗状況が各個体によって異なっていたと想定できる。おそらく各遺体の死亡時期が違うのであろう。また、本例を中心として、12体の人骨が環状に出土しており、古作貝塚では墓域内の中心部に多数合葬・複葬例が存在したことがわかる。

3) 千葉県千葉市誉田高田貝塚検出例 [島津他1954, 出口1991]

1954年に学習院高等科史学部が発掘調査を行い、第5発掘区から多数合葬・複葬例が検出されている(図1-3)。人骨の鑑定を担当した池田次郎は側頭骨の数から最小個体数を17としている。

この土壙の続きを、1990年に千葉県文化財センターが発掘調査している。それによると、件の土壙は堀之内式期に属し、数メートルにもおよぶ大規模なものであり、確認面からの深さは0.2mであった。壁より0.7mほど離れた場所には柱穴状のピットが検出されており、本例の上部には何らかの構造物があった可能性が指摘されている。また、出土人骨の間には間層等は確認されておらず、人骨が直接重なり合った状況であることから、各々の人骨は同時に再埋葬されたものと考えられる。

埋葬された人骨の数は1954年度の発掘と合わせて28体以上である。椎骨や四肢骨が完全に遊離したものと、関節しているものの両者が存在し、複葬時点で個々の遺体の腐敗状況が異なっていたと考えられる。各遺体の死亡時期が違っていたのであろう。多数合葬・複葬例の付近には埋葬施設が集中すること、住居跡分布の空白部分であることなどから、当時の人々が多数合葬・複葬例の付近を墓域として認識していた可能性が高い。また、誉田高田貝塚の集落は出土した土器、遺構からみて、堀之内式期から安行3a式期に営まれたものであることから、この多数合葬・複葬例は集落の開設とほぼ同時期のものとして捉えることができるだろう。

4) 千葉県市原市祇園原貝塚検出例1 [米田耕1980]

祇園原貝塚からは2例の多数合葬・複葬例が検出されている。それぞれを検出例1, 2とする。

1979年に上総国分寺台遺跡調査団が発掘を行い、B2-43区の土壙から検出例1が確認された(図1-4)。この土壙は長径1.5m、短径1.4mの楕円形を呈し、ローム層を0.2mほど掘り込んでおり、底面からは5つのピットが検出されている。また、周囲からは土壙を取り囲むように10個のピットがあることから、何らかの上部構造が存在したと考えられる。頭蓋の数から、埋葬された人骨は6体以上であるが、四肢骨は解剖学的に不自然な位置にあり、頭蓋に比べその数が少ない。時期は堀之内式期である。報告者の米田耕之助によれば、本例は堀之内式期に開設された環状集落内の、中心的な位置に存在しているとされる(図2)。

5) 千葉県市原市祇園原貝塚検出例 2 [鷹野1983]

上総国分寺台遺跡調査団が行った第4次調査において、GIV 310 土壙から検出例 2 が確認されている（図 1-6）。この土壙は長径 1.1m, 短径 0.9m の楕円形を呈するものであり確認面からの深さは 0.6m ほどである。人骨の頭蓋の数からみて、埋葬されたのは 5 体以上と考えられる。この土壙に接して 5 つのピットが存在することから、本例には何らかの上部構造があった可能性が高い。この多数合葬・複葬例を中心として同時期の人骨 12 体が検出されており、この付近が墓域と認識されていたことは間違いないだろう。

6) 茨城県取手市中妻貝塚検出例 [宮内・西本編1995]

1992 年に取手市教育委員会が発掘調査を行い、多数合葬・複葬例が G 地点の「A 土壙」から検出されている（図 1-5）。これらの人骨は最小個体数で 106 体を数え、直径 1.9m ほどの円形を呈する土壙より出土している。人骨の中には椎骨や下顎が関節しているものが存在し、各個体の死亡時点が異なっていたことがわかる。これらの人骨の年齢と性別は、成人男性が 41 例、成人女性が 19 例、若年女性 3、幼児～少年期 29、不明 4 とされている。土壙内から出土した土器から推定して、時期は堀之内 1 式期から 2 式期までのところにおさまるだろう。中妻貝塚における集落の実体は、過去の発掘によって住居跡が検出されていないことから不明であるが、堀之内 1 式期は貝層の堆積が始まった時期であり、貝塚の形成が開始された時期、ないしはそれからさほど離れない時期に多数合葬・複葬が行われたことになる。

多数合葬・複葬例の特徴とその解釈

さて、管見にふれた多数合葬・複葬例に共通する点は、以下のとおりである。

- 1) 多数合葬・複葬が行われた時期は、称名寺式期から堀之内式期という後期前葉までに集中しており、その集落の開始時期ないしは形成再開期にあたる。
- 2) 多くの事例に土壙に付随する遺構があり、何らかの上部構造を持っていた可能性が高い。
- 3) 集落内において、広場や墓域の中心部など、特殊な地点に存在する（図 2 参照）。
- 4) 多数合葬例が検出された土壙に近接して、短期間に繰り返し構築される住居跡が存在するものがある。
- 5) 出土人骨の中に新生児期、乳児期といった幼い子供の事例は含まれない。
- 6) 出土人骨の男女比では、男性が女性よりも多い傾向がある。

1995 年の段階では、筆者はこれらの諸点に加えて当時の集落の動向重ね合わせて、次のように考察した。「加曾利 E3 式期に至って、多くの縄文時代中期の大型集落は終焉をむかえる。その後、加曾利 E4 式期から称名寺式期には、小規模な集落が形成される。そして、これらの小規模集落の住民が再び集合し、新しい場所で、新しく集落を開設する堀之内 1 式期を前後する時期に、死亡時点の異なる人骨を掘りだすなどして持ち寄り、一時に 1 つの土壙に埋葬する。その土壙の位置は集落内でも特別な地点であり、上部構造を設け、シンボリックな建造物としての機能を持たせる。このような葬送儀礼は堀之内 2 式期には単葬を集積する形へと変化し、墓域形成にむけての出発点となった。

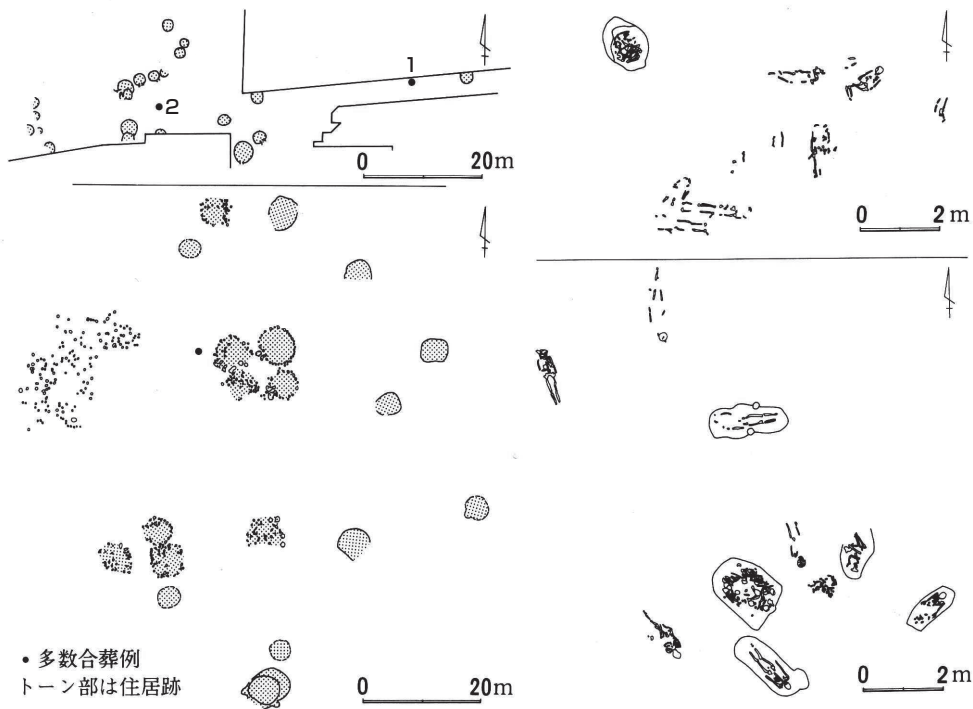


図2 各遺跡における多数合葬・複葬例の位置
左上: 祇園原貝塚 左下: 権現原貝塚 右上: 祇園原貝塚2 右下: 古作貝塚

いままで血縁関係者を含む特定集団を重要視し、それによって異なった埋葬地点を選んでいた人々が、血縁関係者を含む特定集団の人骨を1ヶ所に集めて、一緒に祀るということは、単独に埋葬されていた遺体の個性を消失させ、生前の血縁関係や集団関係を撤廃するということである。そのように理解した場合、多数合葬・複葬例については次のような解釈が可能である。

多数合葬・複葬例は新しく集落を開設する時に、異なる血縁関係者を含む集団が、複数集合し、至近距離において共同生活を始めた時に生じる社会的な緊張を解消するための手段として執り行われた葬送儀礼である。そして、このことによって各集団が相互に親密な絆を求めたのであろう。ヘルマン・オームスは祖霊崇拜について、特定集団への帰属意識を時間の系列において表現したものと述べているが [オームス 1987: 159]、その意味において縄文時代後期には祖霊観念が成立しており、祖霊祭祀が行われていたと考えることができる。この点は墓に關係する配石遺構が後期に至って増加することからもうかがわれる [塚原 1989: 65]。おそらく、これらの配石遺構は多数合葬・複葬例の上部構造と同様に祖霊の存在を指し示す象徴的な意味を持っていたのであろう。多数合葬・複葬例の上部構造や、墓に關係する配石遺構はこれら祖霊祭祀のためのモニュメントであり、集団の帰属意識を高める装置として機能したのであった [山田 1995: 65]。その後にも多数合葬・複葬例について述べる機会があったが、「多数合葬」の場合、この解釈は現在でも大筋において変更の必要性を認めていない。そこで、本稿で取り上げた多数合葬・複葬例のことを、他の事例とは区別するために、限定的に「記念墓」という概念で、一旦把握しておきたい。

これらの点を再度確認した上で、下太田貝塚における多数遺骸集積土坑を検討してみよう。

②……………下太田貝塚における多数遺骸集積土坑

下太田貝塚の位置

下太田貝塚は、千葉県茂原市下太田に所在する。1997年から1999年にかけて総南文化財センター、長生郡市文化財センターによって発掘調査が行われ、縄文時代中期から後期の遺物とともに多数の人骨が出土した〔菅谷編 2003〕。

発掘区は現在の阿久川の流れて北から第2地点、第1地点、第3地点に区分されているが、人骨が主に出土したのは第1地点であり、第2地点からは人骨は出土せず、第3地点からは中期のものと思われる人骨が10体出土している。

多数遺骸集積土坑の様相

多数遺骸集積土坑は3基確認されており、それぞれA・B・C土坑と呼ばれている。いずれも、第1地点における後期中葉の墓域内に存在し、時期的にもこれに準ずるものと考えられている（図3）。以下、報告書〔菅谷編 2003〕の記述に基づきながら、各土坑について検討してみよう。

1) A土坑

第1地点のA2-07・17・18・27・28・38区より、夥しい人骨の集合として検出された（図4-1）。土坑自体のプラン・規模等は、湧水や調査過程における問題等により確認できなかったらしいが、人骨自体は長軸2.8m、短軸1.3mの楕円形の範囲に広がっていた。土坑底部および周辺部に、柱穴等の付随する遺構は確認できていない。

報告書に掲載された写真を見る限り、人骨の各部位が関節連衡しているようには見えないが、報告者の菅谷道保によれば、上腕骨と橈骨・尺骨の関節例や大腿骨と脛骨・腓骨の関節例があったらしい〔菅谷編 2003: 63〕。一方、肩部や頸部、腰部といった部位での関節例はないとのことである。遺体腐敗時に比較的脱落しやすい部位が、すでに脱落していたことになる。

人骨の報告では、「A土坑出土人骨」としてNo.1から338、397までの番号が振られて人骨の形質の記載があり、このほかにA土坑8層、A土坑2区集積といった人骨の記載がある〔平田・星野 2003: 31-116〕。同一番号の中に性別・年齢の異なる複数個体が含まれており、人骨番号というよりは取り上げ時のバスケット番号に沿って記載が行われたものと考えられる。出土人骨の多くは成人骨であるが、中にはNo.100や160・209・296のように、0～2歳までの乳児期段階のものも含まれている。この他、小児期段階にある事例も多々見られ、A土坑においては子供の事例が多いと言える。性別については、残存した部位からは判別が難しいという問題もあり、確定できないものが多いが、全体の最小個体数としては、乳児が3体、幼児が7体、成人が22体（男性8、女性6、不明6）とされている。

また、ほとんどの人骨に齧歯類や犬科の咬痕は見られないものの、No.240・280・283・291・293のように、咬痕が観察される事例もある。このことは、遺体の中には埋葬後に一定期間外気にさら

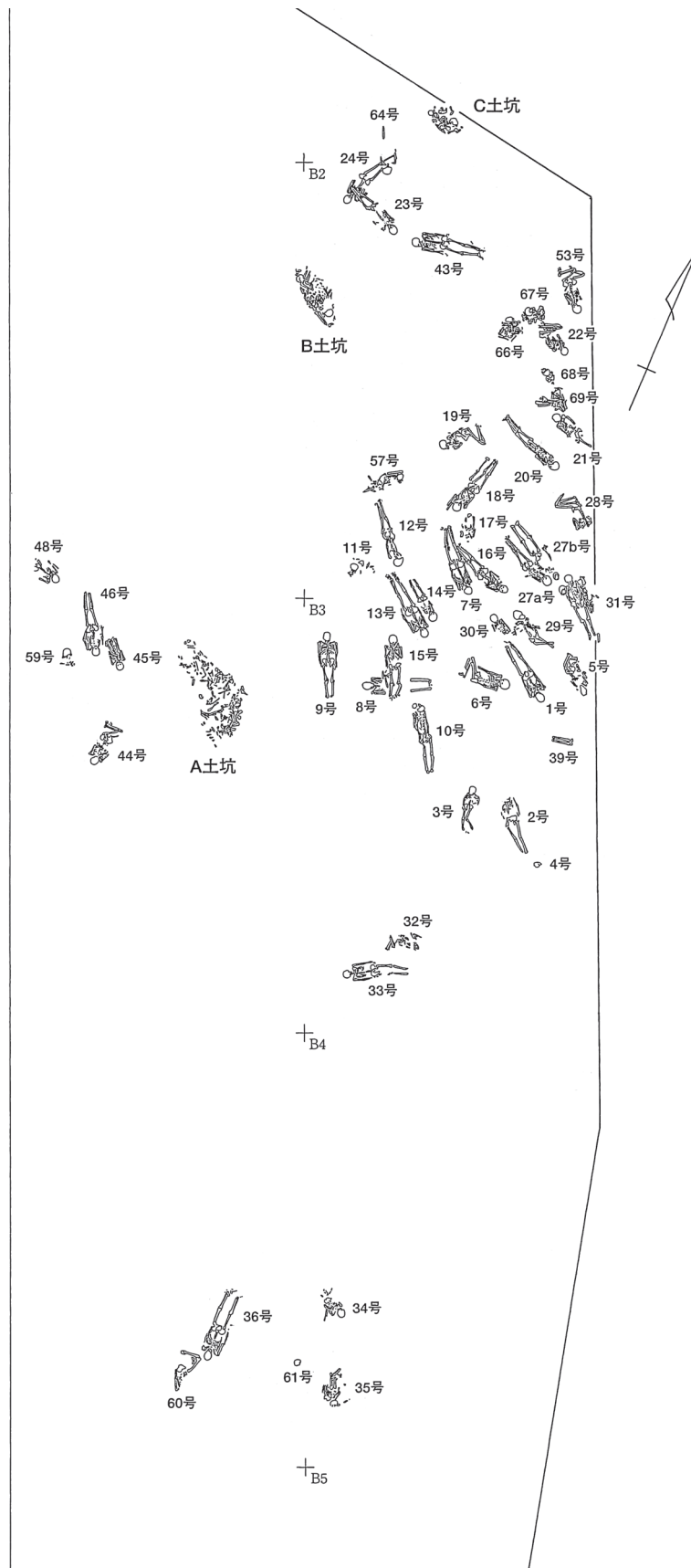


図3 千葉県下太田貝塚における多数遺骸集積土坑の位置 (S=1/160)

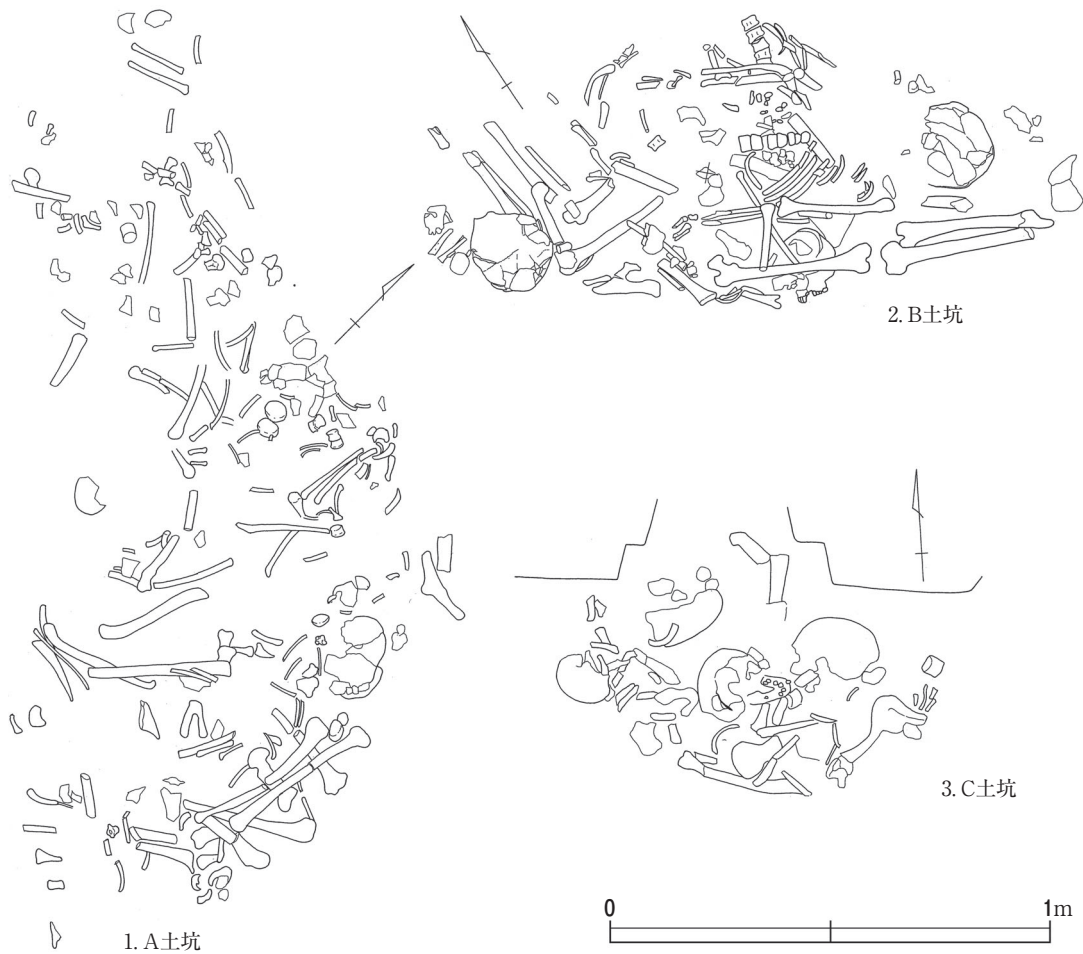


図4 下太田貝塚から検出された多数遺骸集積土坑

されたものがあつたということを示している。

A土坑出土人骨については西本豊弘・篠田謙一らによってmtDNAの分析が行われており、分析が可能であった13体のうち、7体が同一のハプロタイプに属することが明らかとされている〔西本・篠田他2001〕。

2) B土坑

第1地点のB2-20区から30区にかけて位置する(図4-2)。当初は2体程度の合葬例かと思われたが、その人骨下に更なる人骨の集積が存在した。報告者の菅谷によれば、人骨の広がり直径1mほどの円形の範囲に収まり、頭蓋が人骨集積の外側に並ぶ傾向が見られたという〔菅谷編2003:64〕。しかしながら、土壙そのもののプランは確認されておらず、土壙底部および周辺に柱穴等の遺構も確認できていない。そもそも明確な埋納施設が存在したのかどうか、判断に迷う事例である。

報告書には「集合理葬B土壙出土人骨」として単葬25号人骨a)～c)の記載の下にNo.1から124まで番号が振られているが、番号と人骨の1つの部位が対応するものが多く、取り上げ時に人骨を1点ずつ取り上げたものと思われる〔平田・星野2003:116-135〕。報告書の記載によれば、人骨の最小個体数は9体であり、内訳は成人5体、未成年4体である。また、成人のうち性別が判明した

ものは男性3、女性2である。未成年には少年期（6～12歳）、思春期（12～16歳）、青年期（16～22歳）の、3つの年齢段階の人骨が含まれているが、割合として未成年が多いという感がある。

3) C土坑

B1-83・93区で検出されたが、一部が調査区外に延びており、鋼矢板に切られている。土壇のプランは確認されていないが、存在するとすれば、人骨の広がりから想定される土壇規模は直径0.8～0.9m程度の円形になるかと思われる（図4-3）。

報告書によれば、「C土壇出土人骨」としてNo.1から49までの番号が振られている〔平田・星野2003:137-147〕。未成年の最小個体数は4であり、内訳は乳児期1、幼児期2、少年期1である。成人の最小個体数は6であり、1例が男性と判断できた以外は、保存状態不良で判別ができなかったとされる。

③……………下太田貝塚の多数遺骸集積土坑と「記念墓」との比較

A・B・Cの各土坑における埋葬属性

下太田貝塚から検出された多数遺骸集積土坑の概要は上記のとおりである。以下、それぞれの土壇の埋葬属性について、「記念墓」と比較してみよう。

1) 埋葬位置

図3は、第1地点における後期中葉の人骨出土位置である。これをみると、人骨は調査地点の北東側に集中していることがわかる。A土坑は調査地点のやや北西側中央部近くに位置するが、人骨の集中地点からはやや離れているものの、近接して人骨が確認されており、あまり位置的に特殊性を感じられるものではない。B土坑に関しては、周辺に人骨分布の空白地帯が存在し、やや特殊性を感じ無くもないが、その判断は難しい。C土坑にいたっては不明と言わざるを得ない。これらの点からみると、これらの多数遺骸集積土坑が、遺跡内あるいは墓域内において、特別な場所にあるとは積極的には見なせないということになる。

2) 付随する遺構等の有無

いずれの土坑においても、土壇内部、あるいは近接地点に付随するような柱穴等の遺構は確認されていない。ただし、湧水等の水の影響により、調査現場においては土壇のプランさえ明確には確認できない状況であったと推定され、この有無を判断することは難しいが、付随する遺構の存在を積極的に支持するような所見はない。

3) 出土人骨における年齢・性別

人骨の保存状態が不良で性別の判断ができなかったC土坑を除いて、A・Bの各土坑では、判別可能な事例に限れば、男女数の差はほとんどないといって良い。また、A・B土坑ともに未成年の

割合が多く、特に A・C 土壙においては 0～2 歳以下の乳児期の子供が含まれることもわかっている。

下太田貝塚の多数遺骸集積土坑におけるこのような状況は、先の「記念墓」と比較した場合必ずしも一致するものではなく、むしろ異なる属性を持つものとして捉えることができるだろう。

下太田貝塚出土人骨の同位体分析・年代測定結果

ここで、人類学的・分析化学的な視点から、もう少し多数遺骸集積土壙を検討しておきたい。下太田貝塚出土人骨については、米田穰と小山莊太郎が 2012 年にその同位体分析結果、および年代測定結果を公表している [米田・小山 2012]。これは、多数遺骸集積土坑である A 土坑出土人骨 17 体分、B 土坑出土人骨 1 体分、および後期中葉の事例とされた単独・単葬例 24 体分の分析結果である。それによると、まず炭素・窒素同位体比では、多数遺骸集積土坑出土例の同位体平均値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 値が $-19.7 \pm 0.2\%$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ 値が $7.2 \pm 0.7\%$ であり、単独・単葬例の平均値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 値が $-19.8 \pm 0.3\%$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ 値が $7.9 \pm 0.6\%$ となり、単独・単葬例の方が、 $\delta^{15}\text{N}$ 値が有意に高いことがわかった。これについて米田らは、単独・単葬例の人々はおそらく淡水魚をより積極的に摂取していたのではないかと推定しているが [米田・小山 2012: 15, 図 5]、これについては資料の時期差等の問題をもう少し詰めて考える必要があるだろう。

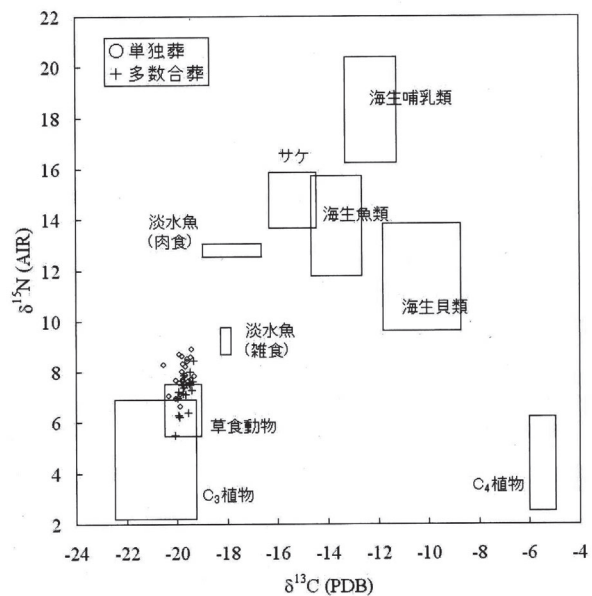


図5 下太田貝塚出土人骨における炭素・窒素同位体比

また、未校正ではあるが、コラーゲンの状態が良く、年代測定可能であった多数遺骸集積土坑出土人骨 8 体 (A 土坑 7 体, B 土坑 1 体) の年代測定値が 3740BP から 3950BP であるのに対して、単独・単葬例 19 体では 3460BP から 4020BP の年代を示した (図 6) [米田・小山 2012: 16]。先の炭素・窒素同位体分析の結果からみると、さほど大きく海洋リザーバー効果の影響を考えなくても良さそうであること、影響があったとしても測定値がこれより古くなることはないことなども勘案すると、多数遺骸集積土坑出土人骨よりも古い事例が、単独・単葬例中に存在することになる。

また、小林謙一による縄文時代後期の土器型式群の年代値は、以下のようになっている [小林 2008: 246]。

- 堀之内 1 式 : 4240 ～ 3980 年前 calBP
- 堀之内 2 式 : 3980 ～ 3820 年前 calBP
- 加曾利 B1 式 : 3820 ～ 3680 年前 calBP
- 加曾利 B2 式 : 3680 ～ 3530 年前 calBP
- 加曾利 B3 式 : 3530 ～ 3470 年前 calBP
- 曾谷式 : 3470 ～ 3400 年前 calBP

この土器型式ごとの年代値をそのまま先の人骨年代測定結果に当てはめると、単独・単葬例中には堀之内1式から加曾利B3式期までの人骨が含まれており、多数遺骸集積土坑には堀之内2式から加曾利B1式期までの人骨が含まれていることになる。この点については、今後年代の補正をはじめさらなる詳細な検討が必要であるが、少なくとも多数遺骸集積土坑の構築が後期集落の開設期に行われたとは考えにくいとは言えるだろう。

なお、報告者の菅谷によれば、後期前葉期(称名寺・堀之内1式期)における単独・単葬例は存在せず、この時期には土器棺墓のみになるとされており[菅谷編2003:68]、年代測定値と調査所見の間に齟齬が生じることとなる。関東地方における他の遺跡の事例をみても、後期前葉の時期に土器棺墓のみからなる墓域構成をもつ遺跡は存在せず、この点についても今後再検討が必要となるだろう。

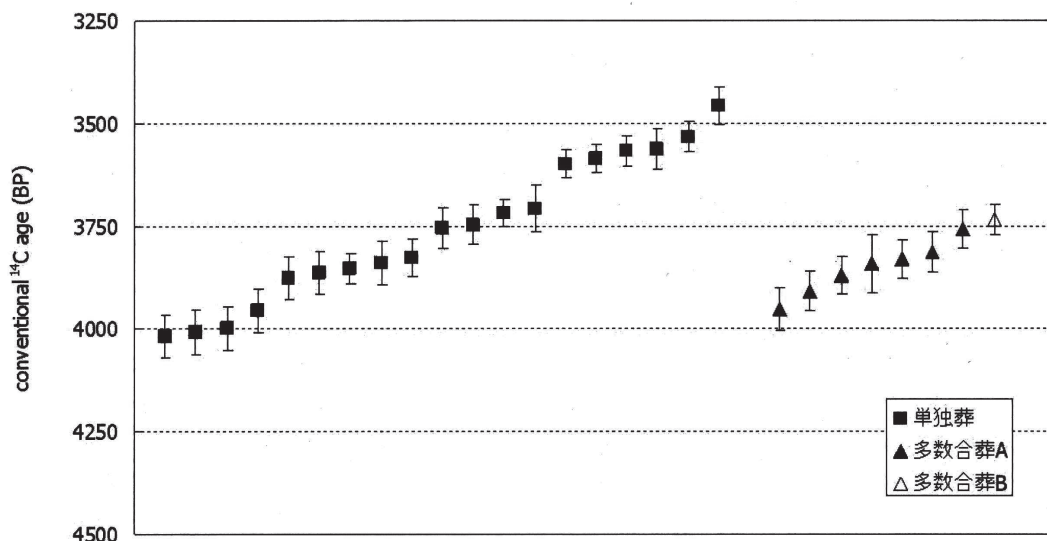


図6 下太田貝塚出土人骨における放射性炭素年代(未校正)

下太田貝塚における多数遺骸集積土坑の性格

以上、下太田貝塚における多数遺骸集積土坑について検討を行ってきた。結論から言うならば、様々な属性を検討した結果、本例は「記念墓」とは見なしがたいということになる。

では、本遺跡における多数遺骸集積土坑はどのように理解すればよいのであろうか。ここからは少々想像を逞しくするが、A土坑中の人骨に齧歯類や犬科動物の咬痕が確認されているもののあることに注意しておきたい。このことは、遺体がある程度の期間地表面等に露出していた可能性を示すものである。また、多数遺骸集積土坑のある第1地点は阿久川の旧河道が存在しており、阿久川は現在の流れになるまでに、縄文時代においても何回か流れを変えて、地表面を浸食したことであろう。そのことは、報告書における次の記述からも想像できる。「A3区の河床面直下から44・45・46・48・59号の5体を、またA4区南東隅とB4区南西隅からは半ば001流路に削られるような状態で34・35・36・60号の4体を検出し・・・」[菅谷編2003:15, 下線筆者]。この文章に書かれた出土状況をそのまま理解すると、阿久川の旧河道によって墓・墓域は削られている、すなわち埋葬さ

れた遺体が水流によって露出した可能性があるということになる。このような点から筆者は、本遺跡における墓域の西側は阿久川の流れによって一部削平を受けており、多数遺骸集積土坑は、地表あるいは河道内に露出した遺体を当時の人々が集積し、「片付けた」ものと考えたい。多数遺骸集積土坑がA・B・Cの3つ存在するということは、このような「遺体片付け」が少なくとも3回、場所を違えて行われたということを示唆しているのではなかろうか。水流による墓域の削平が起こった場合でも、削平された地点における墓域構成、埋葬小群のあり方が血縁関係者を中心としたものであったならば、削平後に周辺に露出した遺体を集積したとしても、その遺体の中には血縁関係が含まれる可能性は高い。そのように考えると、西本豊弘・篠田謙一らによるmtDNA分析結果〔西本他2001〕とも矛盾はしない。

④……………「モニュメント」の存在意義

「記念墓」における被葬者選択性

下太田貝塚例を「遺体片付け」の事例と理解するとしても、他の「記念墓」である多数合葬・複葬例はどのように理解すべきであろうか。ここで再論しておきたい。

まず、注目しておきたいのは、多数合葬・複葬例には乳児期以下の子供が含まれないということである。このことは乳児期以下の年齢段階と幼児期では遺体の取り扱い方、ひいては生前の社会的位置付けが異なっていたことを意味する。

子供の埋葬例を集成してみると、幼児期以降の子供たちは葬法上、基本的には大人とほとんど区別されていない〔山田1997:18〕。これは、幼児期以降の子供たちが特別に扱われることなく大人と同じく集落・集団の構成員として認知されていたことを示すものである。したがって、「記念墓」には、もともと住んでいた集落において、その集落の集団構成員と認知されていた者が対象となったものであったと理解できる。

また、対象となった性別に注目すると、中妻貝塚例に特徴的なように、基本的には成人男性が多いという傾向をもつ。したがって、先の年齢と合わせて、「記念墓」は被葬者が何らかの条件によって限定される、被葬者選択性の高い墓制であったと考えることができるだろう。また、中妻貝塚例からは、魚の椎骨を利用した玉類や鹿角製やイノシシ犬歯製の装身具が出土しており、被葬者の中にこれらの装身具を着装していた人物がいたことになる。縄文時代の中期から後期にかけての墓において、この手の装身具を着装している人物は極めて少ない〔山田2002〕。「記念墓」に入るべき人物が選択される際に、装身具装着者であるということが、判断材料の1つになった可能性は高いだろう。

「記念墓」に埋葬された人々

さて、筆者は、故人においてその個人的記憶、たとえばどのような容姿をしていたか、どのような声で話したか、日常においてどのようなことをしたかといった、いわば一個人そのものの思い出にあたるものを personal memory（個人的な個性の記憶）という概念で把握し、個人の社会的な役

割とそれに基づく行動によって構成される記憶のことを social persona（社会的仮面の意味、個ではなく社会人としての記憶）という概念で把握するようにしている。以下、personal memory を「個人的記憶」、social persona を「社会的記憶」と呼ぶことにしよう。

墓の上部構造など、埋葬後にも他の人が見ることのできるような可視属性は、多くの場合、この「社会的記憶」を反映した可能性が高いと推察される。また、故人の霊に対し個々の「個人的記憶」や「社会的記憶」を消失してしまい、集団化したものを筆者は祖霊と呼んでいる。この場合、通常故人の霊は、年月の経過とともにやがて祖霊化していくことになる。

日本の民俗誌を見る限り、「個人的記憶」や「社会的記憶」といった記憶が消失するのは、大体3世代、100年を超えたころであると推定されるので〔池上1987、スミス1983、オームス1987〕、祖霊化するのは被葬者の死後3世代、およそ100年を経過したあたりにあるようだ。櫻井徳太郎はこれを、「直接経験的具象的祖先観」として概念化している〔櫻井1989：445-448〕。縄文時代の場合においても、当時の寿命が50年前後とした場合、「個人的記憶」が明確に保持されるのは死後3世代くらい（100～150年間程度）までであったことは、容易に想像できる。

一方で、中妻貝塚 A 土壙内に埋葬された人骨では、頭蓋はほぼ完全な形できれいに残り、茎状突起の折れもなく、四肢骨の骨端部などについても破損は、出土時点ではほとんど見られなかった。この点は、実際に中妻貝塚 A 土壙の発掘調査に参加し、人骨を取り上げた筆者の観察による実感である。このことから、これらの人骨が初葬地から極めて丁寧に取り上げられて、集積されたものであると推定することができる。このように遺体を丁寧に取り扱っているということは、初葬地点から人骨を取り上げる段階で、それぞれの遺体に対して「個人的記憶」や「社会的記憶」が存在していたことを想像させる。ということは、埋葬者は被葬者たちからみて、およそ死後3世代以内の人々であった可能性が高いということになる。

一方で、中妻貝塚 A 土壙出土例の場合、人骨頭蓋の mtDNA や歯冠計測値による分析、頭蓋形態小変異など分析から、血縁関係を示唆される個体が多く含まれていることが指摘されているもの〔松村・西本1996、篠田他1998〕、土壙内の人骨（頭蓋）は、このような血縁関係に留意して埋葬されてはなかったことがわかっている。むしろ、わざとバラバラの位置に置かれた可能性すら存在し、このことは「個人的記憶」や「社会的記憶」を考慮することなく、一括して人骨が埋葬されたことを意味している。これなどは意図的に「個人的記憶」や「社会的記憶」を喪失させる行為と考えることができるかもしれない。

中妻貝塚などにおける多数合葬・複葬例あり方は、京都府伊賀寺遺跡の SK03 のような事例と類似する〔岩松2009〕。伊賀寺遺跡 SK03 の場合、人骨が他所で焼かれて墓内に埋葬されたのだが、この場合は人骨が全て一括されており、「個人的記憶」や「社会的記憶」には一切配慮がされていない。複数個体の人骨が一括されている状況は、新潟県寺地遺跡の配石遺構・炉状配石における焼人骨のあり方や、群馬県深沢遺跡 C 区 20 号大型配石遺構における焼人骨のあり方とも類似する〔寺村他編1987、宮崎1987〕。寺地遺跡の場合、敷石状態配石遺構が取り巻く中心部に炉状配石遺構があり、その中には最少で11体分の焼人骨が一括されて堆積していたとされる（図7・8）。焼人骨には頭蓋・四肢骨が含まれている。深沢遺跡 C 区 20 号大型配石遺構の場合も、1点が5mmほどの細片となっているが、頭蓋や四肢骨が確認されている。しかしながら、人骨を火にかけたとしてもすべて

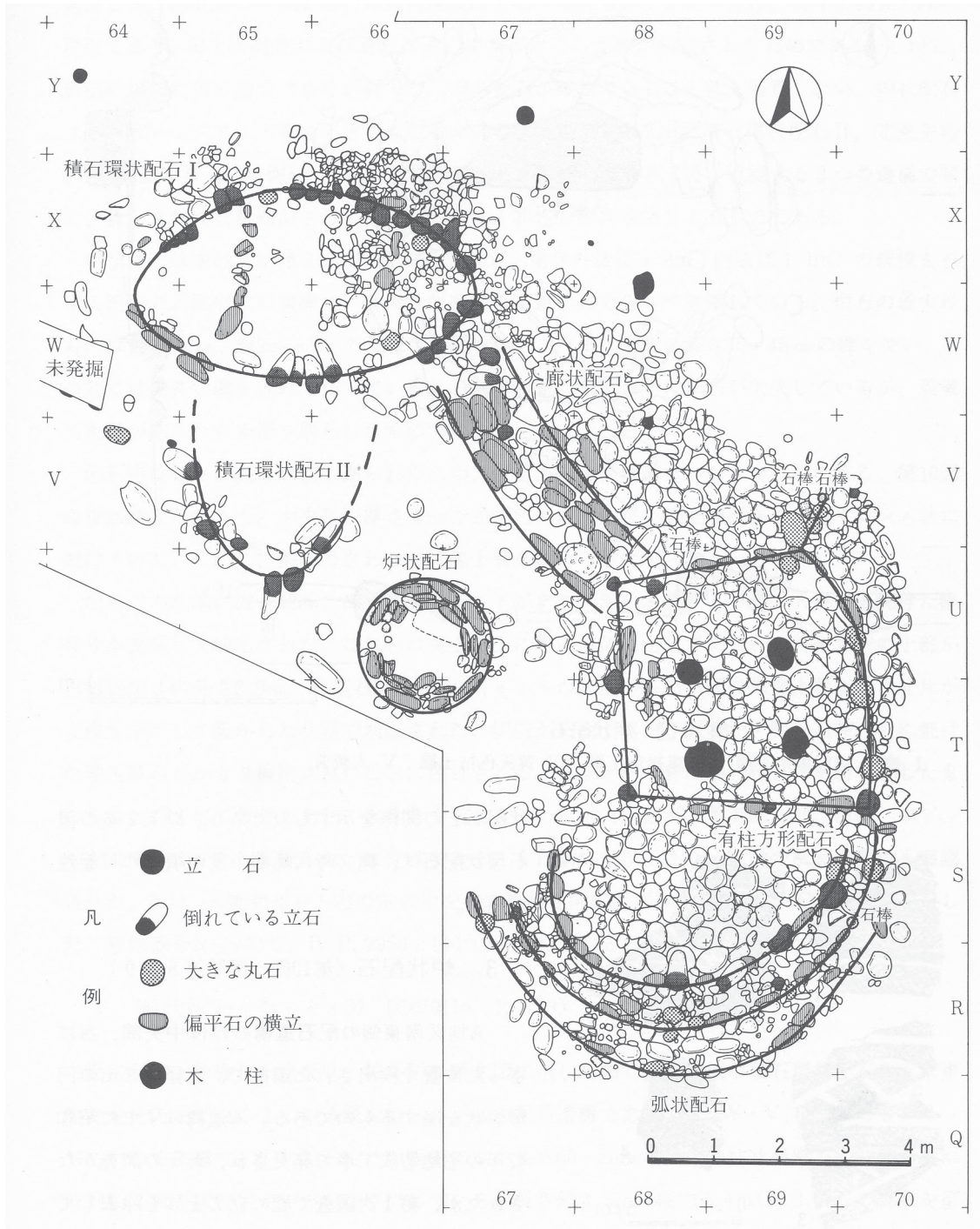


図7 新潟県寺地遺跡における配石遺構



図8 新潟県寺地遺跡の炉状配石における焼人骨出土状況(炉内左側, 白いのが人骨)

を焼却することは困難であり、実際には生焼けとなって腐朽消失してしまった部位も多かったであろう。各遺跡から出土した焼人骨は、あくまでも人骨全体の一部が残存したものと考えておいた方がよい。複数個体の人骨を火にかけて破壊し、一括するという行為は、設楽博己も指摘するように、死者の「個人的記憶」や「社会的記憶」を消失させる、祖霊化のための埋葬・祭祀行為と位置づけることができるだろう [設楽 2008 : 265]。

「記念墓」構築の契機

関東地方において多数合葬・複葬が行われたのは、縄文時代後期前葉までの時期にほぼ限定される。ちょうどこの頃は、気候変動などが原因となって、それまでの大型集落が一度分解し、少人数ごとに散らばって小規模な集落を営んだ後、再度人々が新規に結合し大型の集落が形成されるようになる時期にあたっている。これらの点から、筆者は多数合葬・複葬例を「集落が新規に開設される際に、伝統的な血縁関係者同士の墓をいったん棄却し、異なる血縁の人々と同じ墓に再埋葬することによって、生前の関係性を撤廃し新規に関係性を再構築するものであり、集団構造を直接的な血縁関係に基づくものから地縁的な関係性に基づくものへと再構成させる行為であった」と理解している [山田 2008b:50]。集落の新規統合が行われた時に、集団統合の儀礼、その象徴のモニュメントとして「記念墓」が構築されたのであろう。

ただし、最近では千葉県松戸市牧之内遺跡のように3～4体が合葬・複葬されるような少数合葬・複葬例と呼べるような事例も見つかってきている [斎藤編 2015]。場合によっては、祇園原貝塚検出例1と2もこれに含まれるかもしれない。このような少数合葬事例の場合、集落・集団の統合のモニュメントとされたというよりは、集落内等の比較的狭い範囲における人間関係の再構築を目的と

して行われたものである可能性があるだろう。4体合葬・複葬例の宮城県田柄貝塚の事例なども、これに当てはまるものと考えられる〔手塚編 1986〕。集団関係を再構築する際に合葬・複葬が意図的に行われ、そのあり方・目的の規模によって、合葬・複葬例が多数合葬・複葬例にもなり、少数合葬・複葬例にもなるというような「人間関係再構築原理」とでも言うべき方法論が縄文時代には存在したとみておきたい（図9）。これが発動されたときに合葬・複葬が行われたと考えた方が、モデルとしてはシンプルである。その中の1つが多数合葬・複葬例であり、祖霊祭祀にまで通じるものであったということになる。

さて、多数の死者を祀ったモニュメントにおける集団的祭祀行為・葬送儀礼は、現在の盂蘭盆会などの集まりを見てもわかるように、酒肴の席などを通じながら親類同士の確認、親戚付き合いをより一層密にするなどといった感じで、帰属集団内の紐帯を強化したはずである。そして、それは集団統合の象徴として会葬者個々の直接的な父母や祖父母、曾祖父母を祀ることから、次第に会葬者自身が覚えている3世代程度までの「個人的記憶」を超えて、さらに古い共通の先祖の祀りへ、やがては祖霊祭祀へと連動していったことであろう。

その一方で、「記念墓」において複葬された人々は、先に述べたように極めて被葬者選択性の高い人々であったことも注意しておきたい。これは、当時の生きとし生ける人々が全て等質的な存在では無かった可能性を示唆するからである。この点については、最近渡辺新が矢作貝塚における出土人骨の形質を検討する中で、先天的な披裂奇形を有する人物が「人骨集積」の対象者として選択されていたことを指摘し、特殊な役割を担った人々であったとの考察を行っている〔渡辺・千葉 2017: 26〕。「記念墓」における被葬者選択性を考える際の生前付加属性のあり方として、非常に興味深い指摘であると言えよう。

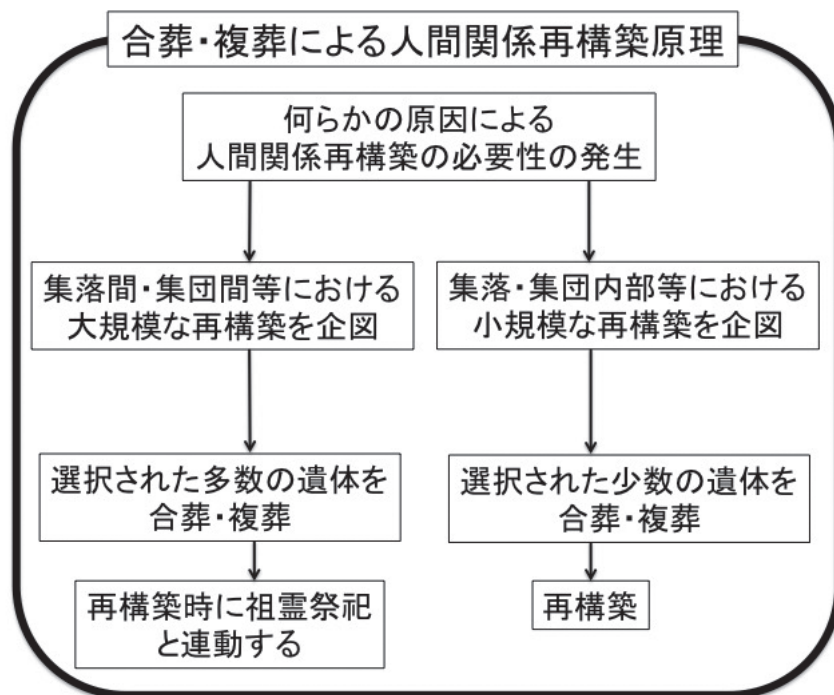


図9 縄文時代の合葬・複葬による人間関係再構築原理モデル

祖霊観・祖先祭祀の成立と「モニュメント」

先のような祖霊観・祖霊祭祀が成立するためには、自分たちが一族や家系などの系譜において、どのような位置にいるのかを知る必要がある。このことは、自己の歴史的俯瞰を行い、時間的変遷の中に自分自身を位置付ける行為でもある。縄文時代の後半期には、このような形で、系譜的な結びつきを重要視する祖霊観という新たな思想が成立していたと見られる。

系譜的観点を重視するような祖霊祭祀を行うためには、それに見合った規模の施設が必要であったろう。先の「記念墓」はまさにその機能に特化させたモニュメントであったし、長野県北村遺跡や山梨県の金生遺跡などにみられるような墓と連動している大型の配石遺構もその類例であろう。先に述べた寺地遺跡や深沢遺跡の事例も同様である。今後本稿では、先の「記念墓」だけでなく祖霊祭祀のためのモニュメントとしての性格をもった大型配石遺構も含めて「モニュメント」という概念で把握することにしたい。

このような自身の歴史的立ち位置を時間軸に対して直線的に理解する死生観を、筆者は系譜的の死生観と呼んでいる。これについては多数合葬・複葬例や「大規模記念物」のあり方、埋葬遺構の重複・累積などと、「祖先観」・「祖先祭祀」・「祖先崇拜」・「祖霊観」・「祖霊祭祀」・「祖霊崇拜」などの各概念との関係性を合せて、これまでもすでに多くの検討が行われている〔阿部2004, 石川2010, 小杉1995, 設楽2008, 谷口2007・2017, 山田1995など〕。

この系譜的の死生観の特徴は、自己の存在を、過去には自分の親、更にその親、未来には子供、孫といった形で歴史的な系譜の中に直線的に位置づけることにある。したがって、往々にしていわゆる祖霊といった概念とリンクし、その概念および死生観の確認行為は祖霊祭祀といった形で発現することが多く、縄文時代の場合もその例外ではないと思われる。当然ながら、そのような系譜的な死生観を有する社会は、集団・個々人ともに系譜的關係を重視するものであり、それが社会構造の根幹をなしたことであろうし、その逆もまた是なりであろう。一方で、縄文時代において血縁関係や遺伝的關係が重要視されていたことはこれまでも繰り返し指摘してきたが、これとて系譜的關係の一種であることは言うまでもない。

祖霊の接合と「伝統」の確立

このように見ていくと、縄文時代における系譜的關係の維持には、2つのあり方が存在したことがわかる。1つめは、死者の「個人的記憶」や「社会的記憶」を代々にわたって維持し続けようとするあり方である。この場合、時間がたつにつれて、やがてはその個々人への記憶が薄れていき祖霊化していくことになる。実際の場面では、単独・単葬例を主体とした墓1つ1つ、墓の集合である埋葬小群、そして墓地全体の一定期間以上の維持・管理が主体となる。

2つめは、現在生きている人々の現実的な都合によって、その系譜的關係の継承を意図的に断絶・変更する、あるいは複数の系譜的關係を統合させて新しい系譜的關係を構築するあり方である。そのために、故人の人骨を集積・一括し、新規にシンボル化・モニュメント化することがあった。系譜的關係が新規に統合・再構成されることになっても、系譜的な死生観は維持・存続されていく。

このような系譜的な関係性の維持や確認、再構成は、なにも既存現生の集団間・内のみで行われ

たものではない。阿部友寿は、配石墓・配石遺構の下部構造と上部構造の間に時間差を読み取り、下部構造の造営者集団と上部構造の造営者集団は異なっていた（阿部は断絶と表現する）と推定し、それを「遺構更新」という概念で把握している〔阿部 2003 : 117〕。そして阿部は、そこから過去の墓（死者）の利用・同化を説明し、その背景として当時の「祖先観」のあり方に注目するという、極めて重要な指摘を行っている。

阿部が指摘する「遺構更新」について、筆者はこれを過去における別集団の系譜的關係に、自己の集団の系譜的關係を接合する、ないしは自己の系譜的關係に過去の別集団の系譜的關係を取り込む作業であり、こうすることによって、自分たちの祖霊と別の集団の祖霊を接合して新たなるアイデンティティを確立し、その地における存在の正統性、その地を優先的に利用する正統性、すなわち「伝統」を主張したものと考えている。

「モニュメント」の存在意義

ここで本稿における筆者の考えをまとめておきたい。

- ・縄文時代の後半期になると、意図的に選択された多数の遺体を一括して埋葬する、あるいは遺構を累積させる、墓域内において特別な場所を占めるなどし、墓を集団の「記念墓」、 「モニュメント」とするような状況が顕著となってくる。
- ・この場合の選択された被葬者は、埋葬者たちから遡って3世代程度までの成人男性を中心とした人々であり、集落の構成員として認知されていた他に、装身具を装着していた人々であった可能性が高く、その意味で全ての点において等質的な人々ではない。
- ・下太田貝塚の事例を、このような「記念墓」と比較検討してみると、多くの部分で異なることがわかった。下太田貝塚の事例は、水流による墓の削平など、何らかのアクシデントによって地表に露出した遺体を集積し、「片付けた」ものである可能性が高い。
- ・集団関係の新規作成や集団統合・紐帯強化のための1つの手段として、人骨および墓の利用が行われるようになり、「記念墓」がその新しい集団の「シンボル」・「モニュメント」となるような状況が創出された。
- ・その精神的・技術的背景には、系譜關係の意図的切断・統合といった、系譜的な死生観の応用が存在する。
- ・大規模な配石遺構も含めて、シンボル化した「モニュメント」において祖霊を祀ることによって、さらなる集団関係が再生産されていくとともに、何故に自分たちがそこに存在し、各種資源を優先的に使用するのかという正統性を表示・再確認することになる。
- ・そこには新たな「伝統」の確立が意図されており、祖霊観の存在および祖霊祭祀の意義を読み取ることが可能である。

おわりに

以上、下太田貝塚から検出された多数遺骸集積土坑の検討を行いつつ、「モニュメント」について述べてきた。「モニュメント」が時期を違えた集団によって更新されていくような事例は、縄文時代

だけにとどまらず、たとえば弥生時代の事例、ひいては現代にも確認することが出来る。

山陰地方には、布団を掛けたこたつを上から見たような形の四隅突出形墳丘墓というものがある。この墳丘墓は主に弥生時代後期のものだが、鳥根県友田遺跡などの事例のように、弥生時代前期の墓地に極めて近接させる、あるいはその墓地をわざと一部覆うようにして墳丘墓が構築される場合がある。鳥根県中野美保遺跡の場合は、もっと顕著であり、後期の四隅突出型墳丘墓を発掘調査したところ、中から中期の方形貼石墓が出てきたことがあった。これなどは先にあった小型の墳丘墓の上に、わざと大型の墳丘墓を被せて築いたことがわかる。

先行する人々の墓の上に、自分たちの墓を乗せる。このことは、他者としての先人の存在を否定する一方で、彼らを自らの系譜の内に接合し、取り込むという、相反した2つの意味が込められていると言えよう。しかし、考えてみれば、現代でもこのようなことは頻繁に行われている。たとえば、新興の和菓子屋が、江戸時代からの伝統のある和菓子屋を買収・合併し、その看板を用いて「創業元禄〇〇年」とCMを打つことなどは、新たな「伝統」の確立、系譜の接合ということが出来るだろう〔山田2015:216-217〕。

これまで述べてきたように縄文時代の人々は、死者を生きる側の都合によって上手に利用することで、自身の社会の再生産・安定化を企図していた。その発想は、縄文時代も今もさして変わらないと言えるだろう。

引用文献

- 阿部友寿 2003「縄文後晩期における遺構更新と「記憶」－後晩期墓壙と配石の重複関係について－」『神奈川考古』第39号, pp.93-130。
- 阿部友寿 2004「遺構更新における骨類の出土例－縄文時代後晩期における配石遺構・墓坑・焼人骨－」『古代』第116号, pp.19-42。
- 池上良正 1987『津軽のカミサマ－救いの構造をたずねて』どうぶつ社。
- 石川 健 2016「民族誌的類推の運用と縄文社会復元」『考古学は科学か 上』田中良之先生追悼論文集, pp.69-89。
- 石川日出志 2010『農耕社会の成立』岩波新書 1271, 岩波書店。
- 岩松 保 2009「伊賀寺地区の調査」『京都府遺跡調査報告集』第133冊, 京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 岡崎文喜 1983「発見された遺構と埋葬人骨」岡崎文喜・柳生頼完編『古作貝塚Ⅱ』, 船橋市教育委員会, pp.17-28。
- 岡崎文喜・柳生頼完編 1983『古作貝塚Ⅱ』, 船橋市教育委員会。
- オームス, H. 1987『祖先崇拜のシンボリズム』弘文堂。
- 小杉 康 1995「縄文時代後半期における大規模配石記念物の成立」『駿台史学』第93号, pp.101-149。
- 小林謙一 2008「縄文時代の暦年代」『縄文時代の考古学』第2巻, 同成社, pp.257-269。
- 斎藤 洋編 2015『千葉県松戸市牧之内遺跡第1～7地点発掘調査報告書』(株)地域文化財研究所。
- 櫻井徳太郎 1989「柳田国男の祖先観」『歴史民俗学の構想』櫻井徳太郎著作集第8巻, 吉川弘文館, (初出は1974・1975『季刊柳田国男研究』第7・8号), pp.440-485。
- 塩入秀敏・助川朋広・齋藤達也編 2002『金井東遺跡群 保地遺跡Ⅱ』坂城町教育委員会。
- 設楽博己 2008『弥生再葬墓と社会』塙書房。
- 篠田謙一・松村博文・西本豊弘 1998「DNA分析と形態データによる中妻貝塚出土人骨の血縁関係の分析」『動物考古学』第11号, pp.1-21。
- 島津修久・森山英一・村津 康 1954『誉田高田貝塚』, 学習院高等科史学部。
- 菅谷道保編 2003『下太田貝塚』総南文化財センター。
- スミス, R. (前山 隆訳) 1983『現代日本の祖先崇拜 (下)』御茶ノ水書房。
- 鷹野光行 1983「祇園原貝塚北側の道路造成部分に関する調査」滝口宏編『祇園原貝塚Ⅲ』上総国分寺台発掘調査概要Ⅹ, 上総国分寺台発掘調査団, pp.92-98。

- 谷口康浩 2007 「祖先祭祀」小杉 康・西田泰民・水ノ江和同・谷口康浩・矢野健一編『縄文時代の考古学』第 11 卷、心と信仰, pp.200-209, 同成社。
- 谷口康浩 2008 「親族組織・出自集団」小杉 康・西田泰民・水ノ江和同・谷口康浩・矢野健一編『縄文時代の考古学』第 10 卷、人と社会, pp.115-132, 同成社。
- 谷口康浩 2017 『縄文時代の社会複雑化と儀礼祭祀』同成社。
- 塚原正典 1989 「縄文時代の配石遺構と社会組織の復元」慶応大学民族学考古学研究室編『考古学の世界』, 新人物往來社, pp.53-70。
- 手塚 均編 1986 『田柄貝塚 I』宮城県教育委員会。
- 出口雅人 1991 『千葉県誉田高田貝塚確認調査報告書』, (財)千葉県文化財センター。
- 寺村光晴・青木重孝・関 雅之編 1987 『史跡 寺地遺跡』青梅町。
- 西本豊弘・篠田謙一・松村博文・菅谷通保 2001 「DNA 分析による縄文後期人の血縁関係」『動物考古学』第 16 号, pp.1-16。
- 花輪 宏編 1987 『堀之内』, 市川市教育委員会。
- 平田和明・星野敬吾 2003 「下太田貝塚出土人骨報告書」菅谷道保編 2003 『下太田貝塚』総南文化財センター, pp.1-181。
- 松村博文・西本豊弘 1996 「中妻貝塚出土多数合葬人骨の歯冠計測値にもとづく血縁関係」『動物考古学』第 6 号 pp.1-17。
- 宮内良隆・西本豊弘編 1995 『中妻貝塚』, 取手市教育委員会。
- 宮崎茂雄 1987 「利根郡月夜野町深沢遺跡出土の骨類について」『深沢遺跡・前田原遺跡』 pp.263-264, 群馬県教育文化財調査事業団。
- 山口 敏 1987 「権現原遺跡出土人骨の概要」花輪宏編『堀之内』, 市川市教育委員会, pp.252-253。
- 山田康弘 1995 「多数合葬例の意義」『考古学研究』第 42 号第 2 号, pp.52-67。
- 山田康弘 1997 「縄文時代の子供の埋葬」『日本考古学』第 4 号, pp.1-39。
- 山田康弘 2002 『人骨出土例の検討による縄文時代墓制の基礎的研究』平成 12・13 年度科学研究費補助金 (奨励研究 A) 研究成果報告書。
- 山田康弘 2008a 『人骨出土例にみる縄文の墓制と社会』同成社。
- 山田康弘 2008b 『生と死の考古学 - 縄文時代の死生観 -』東洋書店。
- 山田康弘 2015 『つくられた縄文時代 - 日本文化の原像を探る -』新潮選書。
- 米田耕之助 1980 「縄文時代後期における一葬法」『古代』第 67 号, pp.31-38。
- 米田 穰・小山莊太郎 2012 「骨の化学分析からみた縄文時代の生業と社会」『考古学ジャーナル』第 630 号, pp.12-16。
- 渡辺 新 1991 『縄文時代集落の人口構造』, 私家本。
- 渡辺 新 1994 『多数人骨集積の類例追加と雑感』, 私家本。
- 渡辺 新 2015 「人骨集積 - 東京湾沿岸における後期前半の事例 -」『季刊考古学』第 130 号, pp.61-64。
- 渡辺 新 2016 「人骨集積」研究の視点 I - 船橋・古作貝塚事例の検討から -」『千葉縄文研究』第 6 号, pp.63-76。
- 渡辺 新・千葉南菜子 2017 「正中唇顎裂に口蓋列が合併した後期の人骨 - 千葉県矢作貝塚 I 号人骨所見 -」『千葉縄文研究』第 7 号, pp.1-30。
- Ishikawa, Takeshi 2014 Social complexity in the Late Jomon period: the constitution of the Shimo'ota shell mound cemetery of the Boso Peninsula, eastern Kanto, Japan JAPANESE JOURNAL OF ARCHAEOLOGY 2 pp.3-33.

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2017 年 3 月 17 日受付, 2017 年 7 月 31 日審査終了)

Reconsideration of Mass Secondary Burials Serving as Monuments : Focused on Mass Burial Pits at the Shimo'ota Shell Mound

YAMADA Yasuhiro

At the beginning of the Late Jomon period, multiple corpses were reburied together in the Kanto district. Such mass secondary burials are found to have some features in common. First of all, they coincided with the appearance of settlements. Secondly, they were situated in special areas in the settlements or cemeteries. Thirdly, they contained many male adult skeletons and no young children skeletons. So far, seven mass secondary burials have been excavated at six sites. This type of burial seems to have served as a monument for ancestor worship rituals. This grave system spread beyond the boundaries of time and space. In fact, burials that are likely to have served as monuments have been found at the Sanganji Shell Mound in Fukushima Prefecture and the Yosekuraiwakage Site in the Taishaku Valley in Hiroshima Prefecture.

This study re-examines three burials unearthed from the Shimo'ota Shell Mound in Chiba Prefecture. They were previously considered as mass secondary burials built as monuments, but this study finds that they did not fall into that category. Rather, it is concluded that they were constructed not as monuments but as mere burial pits to collectively dispose of corpses.

In the latter half of the Jomon period, tombs and other large-scale stone-covered burials were built as monuments, and many of them served as bases for ancestor worship rituals. Apparently, mass secondary burials were developed in the same context. More specifically, in the latter half of the Jomon period, human skeletons and burials became a means of creating new related groups and strengthening their integrity and unity. This resulted in the use of "memorial graves" as symbolic monuments for the new groups. The mental and technical background of this phenomenon was attributed to the view of life and death based on genealogical relationships that were intentionally strengthened or broken. Symbolic monuments built for ancestor worship, including large-scale stone-covered burials, further created new groups and allowed them to prove and reconfirm their legitimacy, or priority right, to claim their land and exploit resources within the boundaries. This was intended to establish new "tradition," which reflected the manifestation of ancestor worship and the significance of such rituals.

Key words: Jomon period, mass secondary burial, monument, ancestor worship rituals, Shimo'ota Shell Mound
